

W-1-3

知覚表現による属性叙述 —「ガスル」型の文と「ヲシテイル」型の文の主題—

岩男 考哲

1. はじめに

1.1 考察対象

・「ガスル」「ヲシテイル」で〈嗅覚〉〈味覚〉〈聴覚〉を表すものが対象。

※本稿では「ガスル」型の文, 「ヲシテイル」型の文と仮称。

- (1) 彼の部屋は妙な匂い (がする／をしている). 〈嗅覚〉
- (2) このお菓子は懐かしい味 (がする／をしている). 〈味覚〉
- (3) あの楽器は心地よい音 (がする／をしている). 〈聴覚〉

→近年, 有題文として用いられる両者の差異が議論の焦点となっている (2節).

[考えたいこと]

動詞「する」を用いた属性叙述文 (有題の「ガスル」型の文と「ヲシテイル」型の文) の違いを本研究では両者の主題に着目して考察。

1.2 構成

- 2節: 先行研究の概観
- 3節: 両文の主題の差異について考察
- 4節: 今後の課題と本発表のまとめ

2. 先行研究概観

2.1 属性を表す「ヲシテイル」型の文

○影山 (1990), 角田 (1991, 2009), 澤田 (2003): 「所有」の観点からの研究

→「所有傾斜」が鍵

cf. 所有傾斜 (角田 1991: 119)

身体部分 > 属性 > 衣類 > (親族) > 愛玩動物 > 作品 > その他

○佐藤 (2003, 2005), 影山 (2004): 文の成立に関する研究

→「根源的属性」という概念に基づく文の成立に関する考察。

※「ヲシテイル」型の文の成立をめぐる議論

2.2 「ガスル」型の文との比較という観点の導入【本研究の出発点】

○澤田 (2012): 「ヲシテイル」型の文の特徴を「ガスル」型の文との比較によって捉えるという観点を導入。〈知覚〉という概念がキーワードに。

- (4) この紅茶はさわやかな味 (がする／をしている). 〈味覚〉
- (5) このワインは金木犀の香り (がする／をしている). 〈嗅覚〉
- (6) この楽器はおもしろい音 (がする／をしている). 〈聴覚〉

「ある特定の環境の中で, 認知主体による探索によって味・匂い・音などの情報が知覚される」と

いう〈知覚〉の過程と、その知覚の内容を「環境にある対象に属性として付与」する〈属性付与〉の過程という2つの認知過程を設定（「属性付与の対象は主題として言語化される(p.207)」）。

※「ガスル」との比較という視点を導入し、両者の特徴を考察

〈両構文の差異（澤田 2012: 208, 下線は岩男）〉

「ガスル」構文は、環境からの情報の「知覚」という認知過程を表し、さらにその情報を環境に帰属させるという「属性付与」の認知過程も表す。それに対して「ヲシテイル」構文は、「知覚」という認知過程は表せず、「属性付与」という認知過程においてのみ現れる形式である。したがって、両者はともに属性叙述の文に現れるが、「ヲシテイル」構文は「知覚」という認知過程をベースにしていない点で「ガスル」構文とは異なる。

○大神 (2019, 2020) : 「ヲシテイル」型の文と〈知覚〉の関係に言及

→ 「ヲシテイル」型の文の成立に根源的・内在的属性という条件は必ずしも関与しないと指摘。
また、澤田 (2012) の〈知覚〉の位置づけに対しても疑問を提示。

・「根源的」「内在的」属性について

- (7) 彼女は誰にでも好かれる性格をしている。
- (8) 特にコンプライアンスに厳しい最近では、大企業の社員は礼儀正しく、口調も丁寧で、穏やかな物腰をしている人がほとんどである。

(大神 2019)

・(注：(7)(8)の下線部のような評価を述べる表現について) それらに注意を向ける主体が主観的に与えるものといえる。

・内在的な属性とは考えにくい。

(大神 2019: 29)

・「知覚」について

- (9) 私からすると、タランチュラはカニを思わせる味をしている。
- (10) ひとくち食べてみると、タランチュラはカニを思わせる味をしている。

(いずれも大神 2019)

・(「ヲシテイル」型の文は「知覚」という認知過程をベースにしていないという澤田 (2012) の指摘について) 「XはYをしている」構文の成立基盤にも「経験主体による環境の探索」を想定することは可能であると考えられる (大神 2019: 31)。

・むしろ、環境の探索なしに事物の性質を捉えることは困難に思われる (同: 34)。

[その他の注目点]

・「知覚」自体はデキゴトであるため、テンス・アスペクトの対立を持つ (澤田 2012: 207) とあるが、「知覚」の認知過程を表せないとされる「ヲシテイル」型の文にもテンスの対立は見出せる。

(11) 昨夜もこのピアノは素敵な音色をしていた。

(12) アップルパイは、ほどよい甘さでおいしかったです！その他のケーキも、いい味をしていました。 (<https://www.lets-gifu.com/g/shop-1257/report/>)

→澤田 (2012) の言う〈知覚〉は「ヲシテイル」型の文にも存在することになるのでは？

[ここまでのまとめ]

- ・〈知覚〉の「ヲシテイル」型の文が表す属性は「根源的」「内在的」に限定されない。
- ・「〈知覚〉という認知過程をベースにする」という澤田（2012）の説明は「ガスル」型の文にも「ヲシテイル」型の文にも当てはまるように見える。

[本発表が重視する課題]

- ・（「ヲシテイル」型の文にも〈知覚〉が認められるのであれば）「ガスル」型の文と「ヲシテイル」型の文の違いが見えづらくなっている。
- ・両文とも〈属性付与〉の過程は存在するとされる（澤田 2012）。そこで、その〈属性付与〉における両文の違いを考える必要がある。

→ 〈知覚〉以外の観点から両文の違いを考えられないか？

3. 両文の主題について

3.1 〈知覚〉だけではうまく説明できない「ガスル」型の文

- (13) このピアノは素敵な音色がする。
- (14) *彼は素敵な歌声がする。
- (14') 彼は素敵な歌声をしている。
- (15) *うちの猫はかわいい鳴き声がする。
- (15') うちの猫はかわいい鳴き声をしている。

→ (14) (15) は〈聴覚〉、つまり〈知覚〉に関わる表現であるのに「ガスル」型の文で表現することが困難。管見の限りでは、先行研究において「ガスル」型の文への〈知覚〉による説明の有効性は検証されていない。しかし、「ガスル」型の文でさえも〈知覚〉ではその特徴を十分には捉えられない。

3.2 「ガスル」型の文の主題

「ガスル」型の文の主題は〈場所〉の解釈が優先される。

- (1') 彼の部屋は妙な臭いがする。 〈カラ／デ〉
- (2') このお菓子は懐かしい味がする。 〈カラ〉
- (3') あの楽器は心地よい音がする。 〈カラ〉

[考察]

- (14) *彼は素敵な歌声がする。
- (15) *うちの猫はかわいい鳴き声がする。

両文とも主題は有生物。しかし、有生物が主題の「ガスル」型の文であっても、次の例は容認度が低くない。

- (16) 彼はいい香りがする。 〈嗅覚〉
- (17) この鳥はフルーツのような味がする。 〈味覚〉

→基本的に「(歌・鳴き)声」とは、主体が意志的・能動的に発するもの。その主体は〈動作主〉。しかし、(1')～(3')で確認したように、「ガスル」型の文の主題は〈場所〉としての解釈が優先される。この〈場所〉と〈動作主〉の解釈がぶつかることが、〈聴覚〉を表す「ガスル」型の文が有生物を主題にとる場合の容認度を下げている。

[ちなみに]

〈場所〉の意味を他の語句で埋めると、主題が有生物でもその語句が無い場合と比較して容認度が上がる。

(18) *彼は素敵な歌声がしたそうだ。

(18') 彼はこの公園で素敵な歌声がしたそうだ。

→この場合の主題は「この公園で素敵な声がした」を知覚した者。

同様に〈嗅覚〉〈味覚〉も、〈場所〉を埋めると主題は知覚者となる。

(16') 彼は、この庭でいい香りがしたそうだ。

cf. 以下のように〈場所〉を埋めても主題に〈知覚者〉とは言えない事物が生起する例も存在し得る。

(19) この本は、後ろのページからカビの匂いがする。

「名詞+の」の主題化であり、「この本の後ろのページから」全体で〈場所〉と捉えることができる。つまり、〈場所〉の一部を主題化したもの。

3.3 「ヲシテイル」型の文の主題

「ヲシテイル」型の文の主題には、「ガスル」型の文で見たような有生物の制約は見られない。

(20) このピアノは素敵な音色をしている。

(21) 彼は素敵な歌声をしている。

(22) うちの猫はかわいい鳴き声をしている。

〈嗅覚〉〈味覚〉にも制約は無い。

(23) 彼はいい香りをしている。 〈嗅覚〉

(24) この鳥はフルーツのような味をしている。 〈味覚〉

つまり、「ヲシテイル」型の文の主題の意味は「ガスル」型の文のそれとは異なる（(19)～(23)に敢えて格助詞を復元するとしたら、ガ格）。

(20') [このピアノガ素敵な音色をしている]コト

(21') [彼ガ素敵な歌声をしている]コト

(22') [うちの猫ガかわいい鳴き声をしている]コト

(23') [彼ガいい香りをしている]コト

(24') [この鳥ガ香ばしい味をしている]コト

→主題は属性を有する所有者 (cf. 森山・梅原・富永 (2015: 164) 「属性主が属性を持っている」)

・上記の指摘により、次の現象も説明可能。

(25) この公園は夜な夜な不気味な声 (がする/*をしている)。

→「公園」は「不気味な声」の所有者ではなく、発生場所。

[ここまでのまとめ]

- ・「ガスル」型の文の主題は〈場所〉の解釈が優先される（それが他の語句で充足されたら、その〈場所を含む〉事態の〈知覚者〉という解釈も不可能ではない）。
- ・「ヲシテイル」型の文の主題は〈(属性の)所有者〉と解される。

3.4 主題のメトニミー成立について

澤田 (2012) が提示する現象に、主題のメトニミー成立の可否に関するものがある。

- (26) この料理は、なかなかいい味 (がする／をしている)。
- (26') このレストランは、なかなかいい味 (??がする／をしている)。
- (27) この弦楽器は、艶やかないい音 (がする／をしている)。
- (27') この若手カルテットは、艶やかないい音 (??がする／をしている)。

(澤田 2012: 213)

澤田 (2012) : 「ヲシテイル」型の文の方が「ガスル」型の文に比べて、〈属性付与〉の認知過程における「主体性がより強い構文」であるため (p.213)。

・本発表の観点では

「料理」や「弦楽器」そのものの方が「いい味」「いい音」の発生する〈場所〉としてより自然であるため。(また、「料理」「弦楽器」は知覚者としての解釈も困難であるため)

3.5 各文は何を述べるのか

・「ガスル」型の文は無題文で特定の事象を述べ得る

- (28) どこかで変な匂い (がする／*をしている)。

→事象の発生場所として主題に場所を提示する。

cf. 「ヲシテイル」型の文も一見主題が文に現れていないように見えることもある。

- (29) 一珈琲を一口飲んで一

ああ、さわやかな味をしているね。

→状況 (目の前の珈琲を飲んだ) から主題は明らか。略題 (仁田 1991)。

・「ヲシテイル」型の文はヲ格の名詞に連体節が必要

- (30) あ。このパンは味 (がする／*をしている)。 cf. 懐かしい味 (がする／をしている)

→「ヲシテイル」型の文は、対象がどのように存在しているのかを述べる。

4. おわりに

4.1 今後の課題

・他の表現の存在

「ヲシテイル」型の文は「～が～を+動詞」という他動詞の文型をとるが、他者への働きかけを感じさせない。ただし、同じ文型で「する」を用いたもので働きかけの意味を持たせたものに「～が～を+させている」という文型がある。

- (31) 萬田久子は初対面の頃から、お酒の匂いをさせていたという。 〈嗅覚〉

(<https://kakaku.com/tv/channel=10/programID=4944/page=1811/>)

- (32) 粒胡椒がびりっと香ばしい味をさせている。 〈味覚〉

(<https://tabelog.com/okayama/A3301/A330101/33003884/dtlrvwlst/B105372755/>)

- (33) 時計はゼンマイ式でカチカチカチ (目覚まし時計) とかカッチンカッチンカッチン (柱時計) と時を刻む音をさせていた。 〈聴覚〉

(<http://asahidake-n.cocolog-nifty.com/blog/2009/04/post-4ef7.html>)

・他の研究との関係

板垣 (2022 予定) : 両文に関与する「主体」に違いがあることを指摘.

4.2 本研究のまとめ

- (ア) 近年, 「ガスル」型の文と「ヲシテイル」型の文との棲み分けが議論されていることを確認.
- (イ) 〈知覚〉という概念だけでは両者の違いが十分には捉えられないことを確認.
- (ウ) 両文の主題に注目し, その差異の一端を指摘.

【参考文献】

- 板垣浩正 (2022 予定) 「知覚表現としてのガスル構文とヲシテイル構文 —主に知覚主体の存在をめぐって—」『KLS selected papers 4』関西言語学会.
- 大神雄一郎 (2019) 「「青い目をしている」構文再考」『日本認知言語学会論文集』19, pp.24-35, JCLA.
- 大神雄一郎 (2020) 「状態・性質を表す「する」構文の意味的基盤」『ことばから心へ』pp.176-186, 開拓社.
- 影山太郎 (1990) 「日本語と英語の語彙の対照」『講座日本語と日本語教育』7, pp.1-26, 明治書院.
- 影山太郎 (2004) 「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4-1, pp.22-37, くろしお出版.
- 佐藤琢三 (2003) 「「青い目をしている」型構文の分析」『日本語文法』3-1, pp.19-34, くろしお出版.
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院.
- 澤田浩子 (2003) 「所有物の属性認識」『月刊言語』32-11, pp.54-60, 大修館書店.
- 澤田浩子 (2012) 「味覚・嗅覚・聴覚に関する事象と属性」『属性叙述の世界』pp.203-219, くろしお出版.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』くろしお出版.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版』くろしお出版.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 森山卓郎・梅原大輔・富永英夫 (2015) 「「属性シテイル構文」の構文文法論的考察」『認知言語学研究』1, pp.156-175.